

# 國學院大學學術情報リポジトリ

國學院大學図書館所蔵『さくらの姫君』：  
翻刻と表現

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 針本, 正行, 亀谷, 粧子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001525">https://doi.org/10.57529/00001525</a>

# 國學院大學図書館所蔵『さくらの姫君』——翻刻と表現——

針 本 正 行  
亀 谷 粧 子

## 論 文 要 旨

國學院大學図書館に所蔵されている『さくらの姫君』について、全文の翻刻をした上で、原文をもとに物語の展開を示し、『さくらの姫君』の表現が歌言葉<sup>カノコトバ</sup>を背景として紡ぎ出されているとの仮定の下に、『古今和歌集』などの八代集の歌言葉と『さくらの姫君』の作中人物の詠歌の歌言葉とを中心に検証した。その結果、主人公「さくらの姫君」の物語前史として、「越えぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみ聞きわたる哉」（『古今和歌集』恋歌二・五八八・貫之）などがあること、妻問い争いに勝を得た「八重紅梅の左中将殿」の求婚譚には、「吉野河いはなみ高く行水のはやくぞ人を思そめてし」（『古今和歌集』恋

歌一・四七一・貫之）などが連想されることを示した。また、「山吹の官人殿」から「唐崎の松の少納言殿」までの妻問い争いに敗れた男君と姫君との詠歌の歌言葉が歌物語的に展開していることも指摘した。さらに、物語の展開に資するように、男君の人物像を象徴する草花の精を神籬のように描いた挿絵と なっていることについて、國學院大學図書館所蔵『四十二の物あらそひ』を参考にしながら確認した。

【キーワード】「さくらの姫君」<sup>ひめきみ</sup>「歌言葉」<sup>うたことば</sup>「翻刻」<sup>ほんてく</sup>「草花の精」<sup>くさばなせい</sup>  
「四十二の物あらそひ」<sup>しじゅうにもの</sup>

## はじめに

1 國學院大學図書館に収蔵されている古典籍の中に、『さくらの姫君』（以下「國學院本」）をはじめとする物語絵巻、物語絵草紙が数

十点ある。<sup>(2)</sup> 國學院本は、すでに、徳江元正氏によつて孤本として紹介されている絵入りの写本一冊である。<sup>(3)</sup> また、『さくらの姫君』は、土井順一氏によつても真宗興正派本山の興正寺に所蔵されている『はなひめの物かたり』（『さくらの姫君』の別称、以下「興正寺本」）写本一冊が報告され、さらに、徳田和夫氏によりご架蔵の断簡一葉が紹介されている。<sup>(5)</sup> 本稿では、國學院本『さくらの姫君』の全文翻刻をした上で、原文をもとに物語の展開を示し、『さくらの姫君』の表現の内実について歌言葉から検証し、興正寺本との校合及び挿絵の構図も確認することを通して、國學院本の特徴について明らかにしたい。

なお、國學院本の翻刻にあたっては、亀谷粧子氏の協力を得た。

#### （書誌）

全一冊、本文料紙は斐紙、袋綴（五つ目綴）、表紙は墨流し。縦26・5糎×横20・8糎。丁数は全十四丁。挿絵は全十六図。帙の表の左側に題箋として「さく羅のひめ君 飛鳥井一位局筆」と墨書がある。帙の開いた左側に「昭和七年初秋 古筆了任鑑」とある。極書の表書に「飛鳥井一位局筆 繪詞四半本一冊 極」、中の古筆用箋に「一位局／姓ハ藤原名ハ雅子／飛鳥井大納言雅親卿ノ女 性画ヲ好ミ／土佐光信ノ風ヲ學ヒ物語又ハ扇合／人物等ヲ描ク岩屋物語画キ其詞ヲ書ス永正年中ノ人」とある。また、副簡極（折紙六つ折）には、「飛鳥井大納言雅親卿女／藤原一位局雅子筆／四半本繪詞壹冊／なか比の事かとよ／真蹟無疑者也／癸酉三月 古筆了任印」とある。

#### 一 『さくらの姫君』の表現

『さくらの姫君』は、吉野の山に棲むさくらの姫君の登場にはじまり、「山吹の官人殿」から「八重紅梅の左中将殿」までの九人の男君たちとさくらの姫君との恋の贈答歌で構成された妻問い争いの物語である。本章では、さくらの姫君の登場は、どのような和歌表現によつて醸成されているのか、また、妻問い争いに敗れた男君とさくらの姫君との贈答歌がどのような歌言葉によつて歌物語的に連鎖しているのか、さらに、さくらの姫君が「八重紅梅の左中将殿」を婿として迎え入れ、その後の一族の繁栄はどのように語られている

のか、などについて検証し、加えて、興正寺本との校合及び挿絵の構図についても確認したい。

(一) さくらの姫君の登場 (二丁才) 第一図

『さくらの姫君』は、「なか比の事かとよ」と語り出され、「よし野山の□にすむ人ありさくらのひめ君とてみめかたちまことに  
いつくしくこゝろさまよしありて何事にいたるまてたをやかに御かたちめてたく物にたとふれはいにしへのやうきひりふしんもかくや  
と思ひ□たり」と、「吉野山」に棲む主人公「さくらの姫君」が登場する。「吉野山」と「桜」は、「み吉野の山べにさけるさくら  
花雪かとのみぞあやまたれける」(『古今和歌集』春歌上・六十・友則)、「越えぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみ聞きわたる哉」(『同』  
恋歌二・五八八・貫之)、「み吉野のよしのの山の桜花白雲とのみ見えまがひつゝ」(『後撰和歌集』春下・一一七・よみ人しらず)、<sup>(8)</sup>「春  
霞立な隔てそ花盛り見てだに飽かぬ山の桜よ」(『拾遺和歌集』春・四二・清原元輔)とある。「桜」を「雪」「雲」と見立て、恋歌では、  
逢瀬がかなわない女君に擬せられてもいる。また、「吉野山」は、「み吉野の山のあなたに宿も哉世のうき時のかくれがにせむ」(『古今  
和歌集』雑下・九五〇・よみ人しらず)とあり、隠遁の地とも詠まれていた。主人公さくらの姫君の出自が語られていないものの、和  
歌表現世界の中で、吉野の山里に隠れ棲む美しき女君像が醸成されている。挿絵第一図前半(二丁ウ)には、中央画面に、姫君が几帳  
の陰に座し、縁に一人の侍女が立ち、二人の侍女が控える様を描く。第一図後半(二丁才)は、姫君邸の庭の様が描かれる。右画面に  
満開の桜樹とそこに数羽の鳥が飛び交い、桜樹の近くで三人の童女が遊ぶ様を描く。画面手前には、四羽の鴛鴦が池で遊ぶ様も描かれ  
てはいるものの、該当する本文はない。鴛鴦の図は、さくらの姫君の繁栄を予祝する意図があるのか不明である。

(二) 山吹の官人殿の求婚譚 (二丁ウ・三丁才) 第二図・第三図

最初の求婚者である山吹の官人殿から「されは四方の花とも心をいろめかしてたまつさをそかよはしける中にもまつ山ふきのくわん  
にん殿より御ふみあり」と姫君へ恋歌が送られる。本文「たまつさ」とあるが、恋歌一首のみしか語られていない。料紙は、萌黄かさ  
ねの薄様と凝ったものであったが、山吹の官人殿は、「としをいてかやうの事申候へは御はつかしく候へともむねの間のくるしさに一

ふて申」と、老人でありながら懸想をするのは恥ずかしいものの胸が苦しくなつて文を書いたとある。山吹の官人殿の贈歌に「さかりなる花のすかたをみしよりもこゝろそまとふきゝのふしさき」とあり、姫君への垣間見を契機としてようやく恋心を訴えたとする翁恋が吐露されている。仲媒役の侍女霞の小宰相が「いかに〜」と、姫君に返歌を勧めるものの、姫君は、山吹の官人殿が「うちなひきよしある人なれともとしをひたるもうるさし」と思つて、「まをなるこゝろのいろをしらせても何しかわせんをひの山ふき」と詠う。山吹の官人殿は年老いているので、惑乱する心の内をはっきりとさせたとしても、「何しかわせん」と拒否するのである。山吹の官人殿の求婚譚は、姫君の返歌をもつて終焉する。この後に展開する求婚譚も、最後の八重紅梅の左中将殿のそれを除いて、姫君の返歌を記して終わり、後日譚が語られることはない。求婚譚は、男君の人物評、垣間見、男君と姫君の贈答歌で構成され、歌物語的である。挿絵第二図（三丁才左余白）には、姫君邸の築山に草花が描かれている。第三図（三丁ウ）は、山吹の官人殿の使者が姫君の侍女に庭で花の折枝に添えて懸想文を手交する様を、邸内では几帳の内に姫君（姫君の侍女小宰相か）の様を、画面右上に桜樹の様を描く。

### （三）藤浪の宰相殿の求婚譚（四丁才） 第四図

第二の求婚者「藤浪の宰相殿」の人物評は語られていない。語られざる物語前史として、藤浪の宰相殿の贈歌「つゝめともたえぬ思ひになりぬれは身もなけつへしいけのふちなみ」の歌言葉「池」「身も投げ」を詠み込む、「同じくは君と並びの池にこそ身を投げつとも人に聞かせめ」（『後撰和歌集』恋四・八五五・よみ人しらず）の詞書「まだ逢はず侍ける女のもとに『死ぬべし』と言へりければ、返事に『はや死ねかし』と言へりければ、又つかはしける」など、逢瀬がかなわない男君と、それを忌避する女君との贈答歌が想起される。また、姫君の返歌「むらさきのたえぬ思ひになりぬともつるのあふせはあらしとそおもふ」の歌言葉「逢瀬」は、『後撰和歌集』「ふるさとの佐保の河水今日も猶かくてあふ瀬はうれしかりけり」（雑二・一一八一・閑院左大臣）以降に見られる。<sup>10</sup>この「逢瀬」は男女の再会に伴う愛情表現であった。しかし、姫君の返歌「つるのあふせはあらしとそおもふ」は、逢瀬などはあり得ないと、『後撰和歌集』閑院左大臣の「逢瀬」とは対照的に、藤浪の宰相殿の恋心を否定している。挿絵第四図（四丁才左下余白）は、藤浪の宰相殿が藤花の枝を背にして、右手に扇を持ち、畳に敷物を敷いて座す様を描く。

(四) 蓮華躑躅の岩の房の求婚譚 (四丁ウ・五丁オ) 第五図

第三の求婚者「蓮華躑躅の岩の房」は、出家の身でありながら、「かやうの事申候へは御はつかしく候へともいつそやその御あたりへつまきにいて候折ふしかすみのたえまよりみまいらせ物思ひとなりてこそ候へむかし」と、薪取りにでかけた際に、姫君を垣間見して物思いになり、「あわれとも君に見せはや人しれすか、る戀ちにまよふこゝろは」と、「戀ち」と「まよふ」の歌言葉を用いて、出家者の恋の苦悩を姫君に訴えている。『千載和歌集』<sup>11)</sup>に、「恋為後世妨といへる心をよめる」「越えやらで恋路にまよふ逢坂や世を出ではてぬ関となるらん」(恋二・七五二・藤原家基)と、歌言葉「恋路」「まよふ」を用いて、恋人に逢えずに迷うことが出家の妨げとなると恋心の苦衷が詠われている。和歌表現にあつては、出家者の「恋路」は「まよふ」心象に繋がっている。なお、國學院本「戀ちにまよふこゝろは」とあるところ、興正寺本「こいちにまどふこゝろを」とあるので、「恋路」「まどふ」を詠み込む恋の始まりの歌も揚げておく。「先に立つ涙とならば人しれず恋路にまどふ道しるべせよ」(『千載和歌集』恋歌一・六七八・右大臣)、「をしかふす夏野の草の道をなみしげき恋路にまどふ比かな」(『新古今和歌集』恋歌一・一〇六九・坂上是則)<sup>12)</sup>などがある。挿絵第五図(五丁オ右下余白)は、蓮華躑躅の岩の房が蓮華を両手に持って座す様を描く。

(五) 椿の大納言殿の求婚譚 (五丁ウ) 第六図

第四の求婚者「椿の大納言殿」の人物評は、「さはくとはおわすれともいとふとくしんけにまします」と語られる。「ふとくしん」は「不徳心」の意味か。椿の大納言殿は、「めつらかなる料紙」を用いて、「人しれぬか、る戀ちにまよふ身をあわれとせめてとふ人もかな」と恋歌を送る。「戀ち」、「まよふ」の歌言葉は、蓮華躑躅の岩の房の贈歌と同一である。<sup>13)</sup> 姫君は、山吹の官人殿を拒絶した時と同じく、椿の大納言殿に対しても「うるさし」と思い、「とへかしと思ふこゝろの玉つさをたれかあわれと思ひやらまし」と返歌をする。なお、椿の大納言殿の贈歌の下の句が國學院本「とふ人もかな」とあるところ、興正寺本「とふ人もなし」、姫君の返歌の下の句が國學院本「思ひやらまし」とあるところ、興正寺本「おもひしるへき」とある。<sup>14)</sup> 國學院本は、姫君に自身の恋心を受け止めてほしいとする椿の大納言殿の思いに対して、姫君が「たれかあわれと思ひやらまし」と、誰も「あわれ」と思う者などはいないと大納言殿の恋心



をはぐらかした表現となっていると解す。挿絵第六図（五丁ウ左下余白）は、椿の大納言殿が椿を背にして、敷物の上に座す様を描く。

（六）青柳の少将殿の求婚譚（六丁オ・六丁ウ前半）第七図

第五の求婚者「青柳の少将殿」の人物評は、「しんしやうにやさしくおわすれともいとみたれかゝるもすこけれ」と、歌言葉「青柳」の縁語「乱れ」をとり入れた表現で語られる。少将殿は、「いつそやほのかにみまいらせて」と、姫君を垣間見て、自身の恋心を伝えようと、「さかりなる花のこゝろのまとわれて思ひみたる、あをやきのいと」と恋歌を送る。初句「さかりなる花」は、最初の求婚者である山吹の官人殿の恋歌の初句と同じであった。<sup>(15)</sup> 歌言葉「青柳」、「乱る」は、『古今和歌集』に、「青柳のいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにけり」（春歌上・二六・貫之）とあり、青柳の少将殿の「やさしくおわすれともいとみたれてかゝる」に繋がるものであり、また、『新古今和歌集』「春雨のふりしく比か青柳のいとゝ乱れて人ぞこひしき」（恋歌四・二二五〇・後朱雀院御歌）は、青柳の少将殿の恋心にも通じるものである。少将殿の贈歌に対して、姫君は、「あおやきの思ひみたれて何かせんいとかすならぬわか身なりしを」と、いまでは都から遠ざかり世間からも相手にされなくなった「我身」であるのに、どうしてあなたは心が乱れるのですかと返歌をする。物語は、姫君にどのような過去があつて、吉野山に棲むことになつたかについては明らかにしないが、個々の求婚者との贈答歌を通して<sup>(16)</sup>に暴かれていく。挿絵第七図（六丁ウ右下余白）は、青柳の少将殿が、青柳の枝を背にして、右手に扇を持ち、薄紫色の敷物に座す様を描く。

（七）卯の花の式部允殿の求婚譚（六丁ウ後半・七丁オ前半）第八図

第六の求婚者「卯の花の式部允殿」（興正寺本は「うのはなのしきふとの」）は、「いつそや御おもかけみまいらせわすれかたく」て、卯の花にちなむ「ゆき」の料紙に、「かすならぬ我身のほとを思ひしれさてもやむへき思ひにあらねは」としたためた。卯の花の式部允殿の歌言葉「かすならぬ我身」は、式部允殿自身を示すが、前段の青柳の少将殿への姫君の返歌「あおやきの思ひみたれて何かせんいとかすならぬわか身なりしを」では、姫君自身を示していた表現に呼应し連鎖している。<sup>(17)</sup> 姫君は、式部允殿の恋歌を見て、「あわれ

とはみなしたまへともいろしろくあひきやうもな」い人物であると式部允殿を評するものの、「卯の花の敷にもあらぬ身にありてをよはぬ枝に心かくらむ」と、式部允殿の思いのありかたを問い質している。挿絵第八図（七丁才右下余白）は、卯の花の式部允殿が卯の花の枝を背にして、右手に扇を持ち、畳の敷物の上に座す様を描く。

（八）楓の蔦の守殿の求婚譚（七丁才後半・七丁ウ）第九図

第七の求婚者「楓の蔦の守殿」（國學院本「かいての蔦のかみとの」、興正寺本「かえてのさまのかみとの」）は、「紅葉かさねのうすやう」の料紙を用いて、「秋ならて色にもいてぬ身なれ共□□ゆへいまそもみちしにけり」と、歌言葉「紅葉」に繋がる「思ひそむ」恋の初心が「いろふかくのみなりし」なのでと、姫君に恋歌を送った。しかし、姫君は、「蔦のかみ殿はいろふかくやさをとこにておはずれともあきならては人にもてなされたまはぬ身なれは」と、前段の卯の花の式部允殿の「いろしろく」と対比するかのようになり、「いろふかく」と評された楓の蔦の守殿に対して、季節が秋ではないので、「秋ならて人にもしれぬ身にありて何しに今はもみちしぬらん」と、楓の蔦の守殿の恋心をはぐらかす。下の句は、山吹の官人殿への返歌「まとをなるこゝろのいろをしらせても何しかわせんをひの山ふき」に通じる表現である。歌言葉「紅葉」は、『古今和歌集』に「つれもなくなり行人の事の葉ぞ秋よりさきのみちなりける」（恋歌五・七八八・源宗于朝臣）とあるように、「恋歌五」では、移りゆき、「飽き」る恋心も表現していた。『新古今和歌集』「わが恋もいまは色にやいでなまし軒のしのぶもみぢしにけり」（恋歌一・一〇二七・花園左大臣）の「紅葉」は、初心の恋心の発露を表現する。挿絵第九図（七丁ウ左下余白）は、楓の蔦の守殿が紅葉の楓の枝を背にして、畳の上に座す様を描く。

（九）唐崎の松の少納言殿の求婚譚（八丁才・八丁ウ前半）第十図

第八の求婚者「唐崎の松の少納言殿」は、歌枕の地として有名な「唐崎」と、姫君の棲む吉野山とは遠く離れてはいるけれども、姫君の噂を聞いて、「しつ心なきほともうかれいて」と思い、「たまほこの道もはるかにへたつれともこゝろのうちを思ひしれ君」と恋歌を送る。しかし、姫君は、「めいしよの人にてましませ共かすかなる御すまいにてしほさへやかぬうらさひしきもおもはしう候はず」



として、「はるく」とよしの、山にすむはなをさひしき浦の松はこふらむ」と、唐崎の松の少納言殿の恋心を問い質している。歌言葉「唐崎」は、『拾遺和歌集』に「みそぎする今日唐崎におろす網は神のうけひくしるしなりけり」（神樂歌・五九五・平祐挙）とあるように、平安時代にはすでに禊ぎの場所であった。この歌の詞書に、「粟田右大臣家の障子に、唐崎に祓したるところに網引く形描ける所」とあり、「唐崎」が藤原道兼家の障子歌となるほどに、歌枕としても定着していたようである。徳田和夫氏により、國學院本「此せうなこんとのほ」（八丁オ七行目）、「みはやとおほしめしあるくれ方に」（九丁オ一行目）に相当するご架蔵の古筆切が紹介されている<sup>19</sup>。

挿絵第十図（八丁ウ右下余白）は、唐崎の松の少納言殿が松の木を横にして、畳の上に扇を構えて座す様を描く。

（十） 八重紅梅の左中将殿の求婚譚とさくららの姫君一族の繁栄（八丁ウ後半〜一四丁ウ） 第十一〜十六図

① 八重紅梅の左中将殿の求婚譚前史（八丁ウ後半・九丁オ） 第十一図

最後の求婚者「八重紅梅の左中将殿」（國學院本「いえこうはい」、興正寺本「八重こうはい」とある。「八」を「い」と書写したと解した。）の人物評は、「かたちもいつくしく此よの人とおほへす」、「そのころ御とし十八にならせたまふ其御しやうそくにからくなひのさしぬきにうすくれなひの御ひた、れつまくれなひのあふきにやうちやうそへてさしたまふ」と紹介される。求婚者の中で、はじめ、年齢、装束の詳細が語られる男君である。左中将殿は、姫君の邸に入ると、「いかなるせんせの契りやふか、りけん」と前世の宿縁が深かったので、「その折ふしひめ君ゆふ月夜物あわれなるにはしちかくいて月をなかめ給ふ」と、縁の端に出て「ゆふ月夜」を眺めていた姫君を垣間見ることになる。姫君は、「十四五はかりにて御かたちたとへんかたそなかりけり」であった。夕月夜の光の下で、姫君の容貌が照らし出されるのである。左中将殿の心象として、「ゆふづく夜さすや岡辺の松の葉のいつともわかぬ恋もするかな」（『古今和歌集』恋歌一・四九〇・読人しらず）が連想される。左中将殿は、その日は「さよふけぬれは」と思つて帰る。挿絵第十一図（九丁ウ）は、紅梅の左中将殿が紅梅の枝を背にして、姫君邸を訪問する様、縁には侍女が控え、姫君が邸内から月を眺める様を描く。

② 紅梅の左中将殿、姫君と贈答歌を交わす（十一オ・十二丁ウ） 第十三図\*錯簡アリ

國學院本は、十丁オ・ウが、十一丁オ・ウと錯簡を生じているので、物語の展開を踏まえて、十一丁、十丁の順に変えて読み解くこ

ととする。紅梅の左中将殿は、「おほろ月夜御こと葉」を忘れがたく、姫君へ「思ひかねひきむすひたるたまつさをかすみの隙に君にみせはや」と恋歌を送る。「おほろ月夜」の言葉がしたためられた姫君の文は語られていない。紅梅の左中将殿の歌言葉「かすみの隙」は、『古今和歌集』「恋歌一」の紀貫之歌「吉野河いはなみ高く行水のはやくぞ人を思そめてし」（四七一）、「世中はかくこそありけれ吹風の目に見ぬ人もこひしかりけり」（四七五）、「山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけり」（四七九）、「逢ふことは雲居はるかになる神のをとにき、つ、恋ひわたる哉」（四八二）などが想起される<sup>21</sup>。霞の小宰相が、恋の仲媒者としての役割を發揮して、「此左中しやうとののはかくれなくやさしき御人なりさのみ人の思ひをむなしくなし給ふ人はすゑわろしいにしへのをの、小町はその姿いつくしくて人くこゝろをつくしたまふゆへ後にはさわのねせりをとりしも心つよきゆへなりさのみ思ひをやふらすともよさまに御返事いたさせをはしませ」と、左中将殿の「やさしき」人柄を褒め、小町のお話もひきながら、左中将殿へ返事をするように姫君に勧める。姫君の本性は、「いわきならねは」とあり、「みせはやといふ玉つさのこの葉にしほるはかりにぬる、袖かな」と、返歌をする。「いわきならねは」は、『伊勢物語』「むかし、男ありけり。女をとかくいふこと月日経にけり。岩木にしあらねは、心苦しとや思ひけむ、やうやうあはれと思ひけり。」（九十六段、一九七頁<sup>22</sup>）にある、「女」の性情に通じるか。錯簡があるので、本場面に相当する挿絵は、第十三図（十一丁ウ左下余白）に、画面左手に、縁に座す小宰相が左中将殿への返書を姫君に勧める様と、姫君が邸内の几帳の下で返書をしたためる様を描く。また、画面手前で、姫君の侍女が左中将殿の使者へ返書を手交する様を描く。異時同図法の構図をとるか。

③ 紅梅の左中将殿、姫君へ数々の文を通わし、結婚（十丁オ・十丁ウ）第十二図\*錯簡アリ

國學院本は、十一丁オ・ウが、十丁オ・ウと錯簡を生じているので、物語の展開を踏まえて、十一丁、十丁の順に変えて読み解くこととする。紅梅の左中将殿は姫君のもとへ数々の文を通わせ、「ついにあふせの中となりたまふ御なかもいとかしこくめてたくましくて日數ふるまゝにひめ君たゝならすみえさせたまふ」と、二人は逢瀬の關係となり、姫君の懐妊が語られることになる。錯簡があるので、挿絵は第十二図（十丁ウ）が相当する。画面上部左に、つがいの鴛鴦が池で遊ぶ様を、画面中央では紅梅の左中将殿と几帳を背にした姫君とが相對して座す様を、中央左では、侍女二人が祝宴に侍る様を、中央画面右奥では、画中画として富士山（？）が描かれた屏風が置かれている様を、画面手前では、侍臣が宴に供する神酒や供物を準備する様などを描く。吹抜屋台の構図をとるか。

④ さくらの姫君、花の精が顕現する中で梅柘植姫を出産（十二丁オ・十二丁ウ前半）第十四図・十五図

姫君の御産所は、「も、の花のさいしやうとの」であった。出産が近くなり、禰の僧都を招き祈祷させたものの、「ことの外大事にいらせ給ふつき物」が顕われた。<sup>(23)</sup> 僧都が正体を質すと、「ひめ君をよろつのはなとも戀かなしみこ、ろをかよはしけるにつひになひかせたまはて此いゑこうはいになひき給ふことに御なかくひなきよしき、ねたく思ひて」と、求婚を拒否された「よろつの花のせひ」は、紅梅の左中将殿との仲睦まじいことを「ねたく」思つて、姫君にとりついたのである。<sup>(24)</sup> しかし、紅梅の左中将殿が、「あら人かみ」であり、その寵愛により、姫君は、「やすく」と、女君を出産した。名前は、「梅柘植姫」と付けられた。挿絵第十四図（十二丁ウ余白）は、画面手前に築山の様を、庭には親子鶏四羽と雛雀の様を描く。また、挿絵第十五図（十三丁オ）は、御産所となった桃の花の宰相殿邸の様を描き、邸内右奥で、几帳の内侍二人が御産をする姫君を見守る様を、右上には、侍女が襦袢に包まれた赤子（？）を抱いている侍女の様を描く。縁には、「つき物」を調伏するための弓を持つ侍臣の様と、出産に奉仕する二人の小舎人童の様を描く。

⑤ さくらの姫君一族の繁栄（十三丁ウ・十四丁ウ）第十六図

物語の終焉の場面である。さくらの姫君に若君の誕生があり、「梅若殿」と名付けられる。<sup>(25)</sup> 亀山（興正寺本「かめ山寺」とある）に稚児とされ、その後「梅法師」となり、「梅法師の卿」として亀山一番の学生（興正寺本「かくしやう」となる。また、「梅柘植姫」は、十三歳となった春に、「山椒の唐枝」を婿として迎え、「椒（はしかみ）の若君」、「たてほの姫君」を出産した。子孫は、あらゆるで栄進し、繁栄した。挿絵第十六図（十四丁オ）は、邸内に、さくらの姫君、左中将殿、若君らが、一族の繁栄を祝う宴の様を描く。縁には三人の侍女が侍し、縁の右奥に侍臣が立ち、庭には草花が描かれている。

## 二 『さくらの姫君』と國學院大学図書館所蔵『四十二の物あらしひ』（絵入り写本一巻）の挿絵

本章では『さくらの姫君』の挿絵の構図の特徴について確認する。『さくらの姫君』の求婚者は、花の精を象徴する人物名にちなむ草花を神籬のように背にして、多くは畳に座す様で描かれている。この求婚者の描写方法について、徳江氏は、「歌仙絵を思わせる擬

人化された花の精たちの描き様は、かの『四十二のもの諍ひ』とも似通っている。<sup>(26)</sup>と指摘される。現在、國學院大學図書館には写本の『四十二のものあらしひ』が二点と、絵入り写本『四十二の物あらしひ』一点が収蔵されている。<sup>(27)</sup>参考資料として後に掲げる、『さくらの姫君』部分の構図と、國學院大學図書館所蔵『四十二の物あらしひ』冒頭部分の構図をふまえると、求婚者を描く基本構図が、歌題をもとにして優劣を詠う『四十二の物あらしひ』に通じる構図を取っていると確認できる。詠歌争いの構図が、複数の男君による妻問い争いの構図の発想に繋がっていることは興味深い。

## まとめ

『さくらの姫君』は、『はなひめの物かたり』と称される写本一冊と断簡一葉しか確認されていない希有な古典籍であり、國學院本『さくらの姫君』については、これまで、基本的な書誌情報、典拠、成立論が提示されてきた。本稿では、國學院本の全文翻刻をした上で、原文をもとに物語の展開を示し、『さくらの姫君』の表現が歌言葉を背景として紡ぎ出されているとの仮定の下に、『古今和歌集』などの八代集の歌言葉と國學院本の作中人物の詠歌の歌言葉とを中心に検証した。その結果、主人公「さくらの姫君」の物語前史として、「越えぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみ聞きわたる哉」(『古今和歌集』恋歌二・五八八・貫之)、「み吉野の山のあなたに宿も哉世のうき時のかくれがにせむ」(『同』雑下・九五〇・よみ人しらず)、「春霞立な隔てそ花盛り見てだに飽かぬ山の桜よ」(『拾遺和歌集』春・四二・清原元輔)などがあり、妻問い争いに勝を得た「八重紅梅の左中将殿」の求婚譚には、『古今和歌集』「恋歌一」の紀貫之歌「吉野河いはなみ高く行水のはやくぞ人を思そめてし」(四七二)、「世中はかくこそありけれ吹風の目に見ぬ人もこひしかりけり」(四七五)、「山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけり」(四七九)などが連想されることを示した。また、「山吹の官人殿」から「唐崎の松の少納言殿」までの妻問い争いに敗れた男君と姫君との詠歌の歌言葉がそれぞれの人物の与り知らない中で歌物語的に展開していることも指摘した。さらに、それに資するように、男君の人物像を象徴する草花の精を神籬に描いた挿絵となっていることを國學院

大學図書館所蔵絵入り写本『四十二の物あらしひ』を参考にして確認した。

本稿をなすにあたっては、古山悟由主幹をはじめ、國學院大學図書館の方々に多大なご配慮をいただいた。感謝申し上げます。

## 注

(1) 國學院大學図書館所蔵の古典籍の目録については、「國學院大學図書館編『國學院大學創立百三十五周年記念 國學院大學図書館所蔵貴重書目録』、二〇一八年」がある。

(2) 國學院大學図書館には、いわゆる奈良絵本と称される、物語絵巻、物語絵草紙が数十点収蔵されている。その中で、論者は、『舟のりとく』をはじめ、寛文・延宝期に作成されたと思量される十点の物語絵巻、物語絵草紙について、解題と全文の翻刻をした。なお、翻刻にあたっては、『舟のりとく』、『呉越絵』、『羅生門』、『咸陽宮』、『かくれ里』の五点は山本岳史氏の、『大織冠』、『倭藤太物語』、『八まんの本地』の三点は太田敦子氏の協力を得た。「國學院大學図書館蔵『舟のりとく』の解題と翻刻」(『國學院大學校史・学術資産研究』第二号、二〇一〇年三月)、「國學院大學図書館蔵『呉越絵』の解題と翻刻」(『同』、二〇一一年三月)、「國學院大學図書館蔵『羅生門』の解題と翻刻」(『同』、二〇一二年三月)、「國學院大學図書館蔵『ひいな鶴』の解題と翻刻」(『同』、二〇一三年三月)、「國學院大學図書館蔵『咸陽宮』の解題と翻刻」(『同』、二〇一四年三月)、「國學院大學図書館蔵『かくれ里』の解題と翻刻」(『同』、二〇一五年三月)、「國學院大學図書館蔵『張良物語』の解題と翻刻」(『同』、二〇一六年三月)、「國學院大學図書館蔵『大織冠』の解題と翻刻」(『同』、二〇一七年三月)、「國學院大學図書館蔵『倭藤太物語』の解題と翻刻」(『同』、二〇一八年三月)、「國學院大學図書館蔵『八まんの本地』の解題と翻刻」(『同』、二〇一九年三月)。

(3) 徳江元正氏「『さくらの姫君』『住吉物語』など―國學院大學図書館蔵善本解題Ⅲ―」『國學院大學図書館紀要』第三号、一九九一年三月)。徳江氏は、本古籍の成立を江戸極初期とした上で、「本書は異類物の一ツ、草木の精たちがさくらのひめ君に懸想をする、その懸想文と恋の和歌とを中心にして展開する、単純な筋の短篇である。目下のところ、孤本としてよからう。」と指摘さ



れた。その後、「はなひめの物語」としては、恋田知子氏の解説（徳田和夫氏編『お伽草子事典』三九八・三九九頁、東京堂書店、二〇〇二年）があり、また、國學院本『さくらの姫君』の解題として、山本岳史氏（『國學院大學創立百三十年記念 國學院大學所蔵古典籍解題―中世散文学編―』五六一・二頁、二〇一四年）がある。影印として、「國學院大學図書館所蔵『さくらの姫君』影印」（針本正行編『物語絵の世界』、平成二三年）がある。國學院本は、現在、唯一の絵入り写本である。

- (4) 土井順一氏「翻刻 新出御伽草子『はなひめの物かたり』」（『国文学論叢』四〇、一九九五年三月）。土井氏は、興正寺本の書誌について、「写本一冊。〔寸法〕縦27・5糎、横21・2糎。〔料紙〕楮紙。全八丁」と報告されている。論者は、興正寺本について未調査であるので、國學院本の翻刻及び國學院本と興正寺本との校合にあたっては、土井氏の興正寺本の翻刻の学恩をいただいた。また、校合にあたっては、人物呼称、和歌表現などに注目した。

- (5) 徳田和夫氏「お伽草子『はなひめの物語の断簡』―物語切の紹介(一)―」（『学習院女子大学紀要』第九号、二〇〇七年）。國學院本の「極書」「副簡極」の意義、國學院本と興正寺本との校合方法などについて学恩をいただいた。

- (6) 翻刻にあたっては、仮名遣いは校訂せずに、原本のままとし、また、判読不可能な箇所は、で示した。

- (7) 『古今和歌集』の本文は、新日本古典文学大系（岩波書店、一九八九年）による。以下同じ。

- (8) 『後撰和歌集』の本文は、新日本古典文学大系（岩波書店、一九九〇年）による。以下同じ。

- (9) 『拾遺和歌集』の本文は、新日本古典文学大系（岩波書店、一九九〇年）による。以下同じ。

- (10) 吉野朋美氏は、「逢瀬」の例は『後撰集』以降に見られ、そのほとんどは川の「瀬」との掛詞で詠まれる」（久保田淳・馬場あき子編『歌枕歌ことば大辞典』五六頁、角川書店、一九九九年）と指摘される。

- (11) 『千載和歌集』の本文は、新日本古典文学大系（岩波書店、一九九三年）による。以下同じ。

- (12) 『新古今和歌集』の本文は、新日本古典文学大系（岩波書店、一九九二年）による。以下同じ。

- (13) 表現の重複ではあるが、複数の求婚者の姫君への恋心が物語の展開の中で連鎖しているともいえる。

- (14) 原典を遡及する視点、書写過程を推定する視点などからの考察もすべきであるが、現存する写本、古筆切を調査した上で卑見を



述べることとし、今後の課題としたい。

- (15) 「さかりなる花」は、歌言葉としては熟していない。求婚者たちの姫君を象徴する表現として「さかりなる花のすかたをみしよりも」、「さかりなるはなのこゝろのまとわれ」という類似のそれがあったと解釈した。
- (16) 翁恋、出家者の恋など、個々の求婚者との物語の中でしだいにさくらの姫君の本性の多面性が象られて、八重紅梅の左中将殿との結婚に至るといふ物語の構造となっている。
- (17) 「数ならぬ身」は、「花筐めならぶ人のあまたあればわすられぬらむ数ならぬ身は」(『古今和歌集』恋五・七五四・よみ人しらず)とあるように、男の心情とも、女の心情とも読み取れる表現である。姫君が青柳の少将殿の思いをはぐらかす歌言葉として用い、卯の花の式部允殿は自身の恋心を訴えるものとして贈歌に詠み込み、それらが物語の展開に奉仕しているともいえる。
- (18) 「蔦」と「左馬」の漢字の書写に伴う問題かとも思量されるが、國學院本「蔦のかみとの」を本文として用いた。
- (19) 徳田和夫氏は、ご架蔵の古筆切の本文と、國學院本と興正寺本の当該場面のそれを掲げて、「まず桜の姫君の返歌は、初句に異同がある。断簡、興正寺本では、「はるく」の、國學院本は「はるく」とである。前者が広く行われていたとすべきか。断簡2行目の「かすかのすまひして」は、國學院本、興正寺本には、「かすかなる御すまいにて」とある。文脈上からして、「幽かなる(= 人氣がなく、もの寂しい)御住まひ」のことであろう。断簡のそれは、やや意味が通りづらい。もともと、室町期には形容詞、形容動詞の語幹に助詞を付けた用法が行きわたっており、(右の「はるく」も同様)、断簡が誤りとは断じられない。断簡7行目の「八重こうはい」は、興正寺本は「八重こうはい」とする。國學院本のそれは「八」が「い」に近いものとなっている。断簡12行目「みはやとおもひ」は、國學院本は「しのひてみはやとおほしめし」、興正寺本は「しのひてみはやとおもひて」である。こちらの「忍びてみばや」のほうが、婦問いの場面としては効いている。」(前掲(注5)論)と指摘されている。徳田氏に より、当該断簡の書誌について、「断簡、一葉。上、下縁は損傷している。「書写期」室町後期。「寸法」縦16・7糎、横18・9糎。「料紙」斐紙。「行数」十二行。「極札」一枚。縦12・0糎、横1・9糎・墨書で「後奈<sup>不</sup>院<sup>不</sup>勾<sup>不</sup>當<sup>不</sup>内<sup>不</sup>侍<sup>不</sup>此<sup>不</sup>せうなこん殿<sup>不</sup>印」<sup>不</sup>と報告されている。
- (20) 現存の國學院本は改装されている。錯簡は、書写過程ではなく、改装の際に生じたものであろう。

- (21) 恋部立ではないが、「さくら花」「山桜」を詠じた貫之詠として、「ひとめ見しきみもや来るとさくら花けふは待ちみてちらばちら南」「春霞なに隠す覧さくら花ちる間をだにもみるべき物を」「古今和歌集」「春歌下・七八・七九」がある。
- (22) 『伊勢物語』の本文は、新編日本古典文学全集12『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』一九七頁 小学館、一九九四年)による。
- (23) 姫君の出産の場に「つき物」が顕現した典拠として、徳江氏(前掲(注3)論)、徳田氏(前掲(注5)論)は、『源氏物語』「葵卷」で、六条御息所が登場した場面を指摘される。
- (24) 花の精たちの妻問いや花の精と人間との異類婚姻譚などは、『さくらの姫君』の主題に関わるものである。徳江氏は、「草木の精という趣向から直ちに連想されるのは、謡曲「花軍(はないくさ)」の替間「菓争(このみあらそひ)」である」(前掲(注3)論)と指摘される。『花軍』の主旨は、「女郎花の精あらわれて。白菊ひとりか籠を専にする恨を述べ。同心の花どもを語らひ來りて。菊を征伐せしむる事を作れり」(謡曲評釋第一冊)百七十一頁頭注解説、博文館、明治四十年)である。また、徳田氏は、「姫君が多くのお求婚者を次々と退ける作品には『玉虫の草子』があり、やはり異類物である。また、姫君の乳母「霞の小宰相」が仲をとりもつさまも面白く、この点は『姫百合』を想起させる。」(前掲(注5)論)と指摘され、さらに、草花樹木の異類物、およびその合戦譚についてのご論もある(『お伽草子の後継―伝季吟筆・異類合戦物『合戦絵巻』について(付・翻刻と釈文)―』(『学習院女子大学紀要』第八号、二〇〇六年)。なお、菊の精と姫君との恋物語が展開する、御伽草子『かざしの姫君』(『室町物語集 下』二九三―三〇九頁所収、岩波書店、一九八九年)も想起される。
- (25) 『さくらの姫君』の伝本、書写者、などの問題として認識するものであり、作品論としてはどのように読み解くのかについては、今後の課題としたい。
- (26) 徳江氏(前掲(注3)論)。
- (27) 國學院大學図書館所蔵の写本二点については、山本岳史氏による解題(『國學院大學創立百三十周年記念 國學院大學所蔵古典籍解題―中世散文文学編―』五六二・三頁、五六四・五頁、二〇一四年)がある。また、近年、絵入り写本『四十二の物あらそひ』(一

卷、もとは冊子本。三二紙継ぎ。紙高二七・五糎、長さ六米・五十糎。室町時代末期頃写か。も國學院大學図書館の所蔵になった。今後、國學院大學図書館所蔵の『四十二の物あらそひ』を精査した上で、絵巻・絵本、写本、古活字本などの形態の相違による本文の問題や挿絵の構図についての報告もしたい。なお、真下美弥子氏が四十数本の『四十二のものあらそひ』の諸本を調査され、その中で九種の絵巻及び絵入り写本を報告されている（「御伽草子『四十二のものあらそひ』考」『国語と国文学』62―9、一九八五年九月）。『四十二の物あらそひ』新出写本について、吉海直人氏が報告されている（「新出写本『四十二の物あらそひ』の紹介と翻刻」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第二十九卷 二〇二二年三月）、「新出写本『四十二の物あらそひ』の紹介と翻刻（その2）」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』第三十八卷 二〇二二年七月。

『さくらの姫君』翻刻

なか比の事かとよよし野山の□にすむ 《一丁・オ》

人ありさくらのひめ君とてみめかたちまことに

いつくしくこゝろさまよしありて何事にいたる

またたをやかに御かたちめてたく物にたとふ

れはいにしへのやうきひりふしんもかくやと

思ひ□たり

\*以下、六・七行分余白

\*第一図（前半）《一丁・ウ》、第一図（後半）《二丁・オ》

されは四方の花とも心をいろめかしてたま 《二丁・ウ》

つさをそかよはしける中にもまつ山ふきの

くわんにん殿より御ふみありもへきかさねのう

すやうにこまくとそかゝれたりとしをいてかやう

の事申候へは御はつかしく候へともむねの間

のくるしさに一ふて申とて

さかりなる花のすかたをみしよりも

こゝろそまとふきゝのふしざき

とかきてつかはしけりひめ君の御めのとにかすみ

のこさいしやうとのとてありけるかこれをとりにてま

いらせけるひめ君かほうちあかめ給てとかく物を

のたまはすこさひしやういかにくと申されければ

此くわんいん殿はうちなひきよしある人なれともとし

をひたるもうるさしとて 《三丁・オ》

まとなるこゝろのいろをしらせても

何しかわせんをひの山ふき

\*以下、左余白に第二図

\*第三図《三丁・ウ》

ふちなみのとうさひしやう殿より御ふみあり

その御こと葉に 《四丁・オ》

つゝめともたえぬ思ひになりぬれば

身もなけつへしいけのふちなみ

ひめきみのこれを御覧して此人はうつ

くしくゆふにおはすれとも松ざり給ふもむつ

かしとて御返事に

むらさきの あらし

たえぬ とそ

思ひに おもふ

なりぬとも

つゐの

あふせは

\*左下余白に第四図

れんけつ、しのいわの房より御ふみありしゆつ 《四丁・ウ》

けの身としてかやうの事申候へは御はつかしく候へとも

いつそやその御あたりへつまきにいて候折ふし

かすみのたえまよりみまいらせ物思ひとなりてこそ

候へむかしさるためしの候しかてらの上人は御手はかりを

たまはりてにとるからにゆらくたまのをなと、申せし

も御なさけゆへとかやとて

あわれとも

かゝる戀ちに

君に

まよふ

みせはや人しれす

こゝろ

は

とかきてつかはしけりひめ君

《五丁・オ》

御覽してあなあさましやあの

しゆつけの身としてかゝる

こと葉いふにくさよとて

いそき文をかへされけり

\*右下余白に第五図

つわきの大なこんとのより御ふみありめつ

《五丁・ウ》

らかなる料紙にかくなん

人しれぬかゝる戀ちにまよふ身を

あわれとせめてとふ人もかな

此大なこんとのはさはくとはおわすれとも

いとふとくしんけにましますもうるさし

とて返しに

とへかしと思ふこゝろの玉つさを

たれかあわれと思ひやらまし

\*左下余白に第六図

あをやきのせうしやうとのより文のあり

さてもいつそやほのかにみまいらせてより

一すちの物おもひいかてしらせまいらせ候はんとて

さかりなる花のこゝろのまとわれて

思ひみたる、あをやきのいと

まことにせうしやうとのはしんしやうに

やさしくおわすれともいとみたれか、

るもすこ

けれ

はとて返事に

あをやきの いとかす

《六丁・ウ》

ならぬ

《六丁・オ》

思ひみたれて わか身

何かせん なり

しを

卯の花のしきふの允殿より

ゆきのれうしにこまくと

かゝれけるいつそや御おもかけみまいらせ

わすれかたく候とて

かすならぬ さても

我身の やむへき

ほとを

思ひしれ 思ひにあらねは

\*右下余白に第七図

ひめ君御覧してあわれとはみなし

たまへともいろしらくあひきやうも

なくをはしますとて

卯の花の数にもあらぬ

身にありて

をよはぬ枝に心かくらむ

かいての蕙のかみとのより御ふみあり紅葉

かさねのうすやうに思ひそめてしよりいろ

ふかくのみなりしとて

秋ならて色にもいてぬ身なれ共

□ ゆへいまそもみちしにけり

\*右下余白に第八図

ひめ君御覧して蕙のかみ殿はいろふかく

やさをとこにておはすれともあきならては

人にもてなされたまはぬ身なれはとて御

返事に

秋ならて 何しに

人にも 今は

しれぬ もみち

身に しぬらん

ありて

\*左下余白に第九図

その名きこえたるからさきの松のせうなこんとのより《八丁・オ》

御ふみありはるくとのみちなれはきゝをよひ

まいらせてよりしつ心なきほともうかれいてゝ

とかき留て

たまほこの道もはるかにへたつれとも

こゝろのうちを思ひしれ君

《七丁・オ》

《七丁・ウ》



此せうなこんどのはめいしよの人にてましませ共  
 かすかなる御すまいにてしほさへやかぬうらさひ  
 しきもおもはしう候はすとて

はる／＼と

よしの、

山に

すむはなを

さひしき

松は

浦の こふらむ

こゝにいえこうはいの左中将とのとてをはし  
 ましけるかかたちもいつくしく此よの人とも  
 おほへすされは此はなひめの事を心に  
 懸てあわれいかなるついてもかなしのひて

\*右下余白に第十図

みはやとおほしめしあるくれ方にかの御しよ中へ  
 たちいてたまひしにそのころ御とし十八に  
 ならせたまふ其御しやうそくからくれなひのさし  
 ぬきにうすくれなひの御ひたゝれつまくれなひの  
 あふきにやうちやうそへてさしたまふひめ君のすみ

《八丁・ウ》

かへたち入給ふにいかなるせんせの契りやふかゝりけん  
 その折ふしひめ君ゆふ月夜物あわれなるにはし  
 ちかくいて月をなかめ給ふとしの程十四五はかりにて  
 御かたちたとへんかたそなかりけりさ中しやうかすみの  
 たえまにかくれいてみ給ふもつゝみかたくをほしめせ  
 ともさよふけぬれはかへりぬ

\*第十一図《九丁・ウ》

\*十丁と十一丁に錯簡があり。

《十丁・オ》

さちうしやうなのめならずよるこひてかす／＼の  
 御ふみかよひけるほどにそのかすつもりてついに  
 あふせの中となりたまふ御なかもいとかしこくめて  
 たくまし／＼て日數ふるまゝにひめ君たゝならず  
 みえさせたまふさちうしやううれしくおほし  
 めす

\*第十二図《十丁・ウ》

その、ちはたえぬ思ひになりぬれは文かよひ  
 けるおほろ月夜御こと葉の末もいとあわれに  
 をほしめしわすれかたくて

《十一丁・オ》

思ひかねひきむすひたるたまつさを  
 かすみの隙に君にみせはや と

ありければこさいしやうの局申けるは此左中しやう  
 とのはかくれなくやさしき御人なりさのみ人の思ひ  
 をむなしくなし給ふ人はすゑわろしいにしへ

のを、小町はその姿いつくしくて人くこゝろを  
 つくしたまふゆへ後にはさわのねせりをとりしも心  
 つよきゆへなりさのみ思ひをやふらすともよ

さまに御返事いたさせをはしませと申ければひめ  
 君いわきならねはさらはとて

みせはやといふ玉つさのこの葉に

しほるはかりにぬる、袖かな

とかきたまへるをめのとと

りてつ御つかひにたひに

けり

\*左下余白に第十三図

《十一丁・ウ》

《十二丁・オ》

さるほどに御さむしよところはも、花のさいしやう

とのにてそありける御けつきとうりうあり

いか、せむとてまきのそうつをしやうしていなら

せ給ふことの外大事にいらせ給ふつき物あり

何ものといへはひめ君をよろつのはなとも戀か

なしみこゝろをかよはしけるにつひになひかせた

まはて此いゑこうはいになひき給ふことに御

なかくひなきよしき、ねたく思ひてよろつ

の花のせひひめ君につきよりましにわれもくと

ねためとも此左中しやうとのはあら人かみの御てふ

あひにてましませはその御ちかいにて御さんのひ

もやすくとまふけ給ふことにいつ

ひめ君なりやかて御名をはむめつけ

ひめとそ申けり

《十二丁・ウ》

\*左余白に第十四図

\*第十五図《十三丁・オ》

やかてほとなふわかきみいてきたまふせいしん

《十三丁・ウ》

ほともましまさす御名をは梅わか殿とそ申

けりわかきみをはかめ山にちこになして

をき後にはほうしになし給ふむめほうしの

きやうのとのとそ申けるかめ一はんのしほある

人にておはしける又梅つけ姫十三と申はる

の比さんしよのからゑたとのにあわせ給ふつほね

をこしらへて入むこにとり御なかいとかしこく

めてたくてむめつけひめた、ならずなり給ふ

やすくとはしかみのわかきみ又たてほのひめ君  
 なとりくとにさかへ給ふ人くにもちいられ候事  
 なめならず

\*第十六回《十四丁・オ》

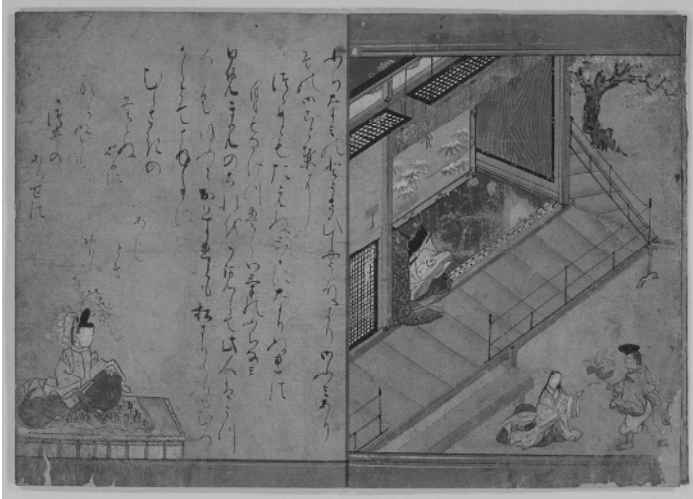
されはむめつけひめもむめにも、のきやうのとの 《十四丁・ウ》

いかなる御いわひのさしきへも又月みはなみの御

さしきへも又はも、しきの御ましろいにもたくひ

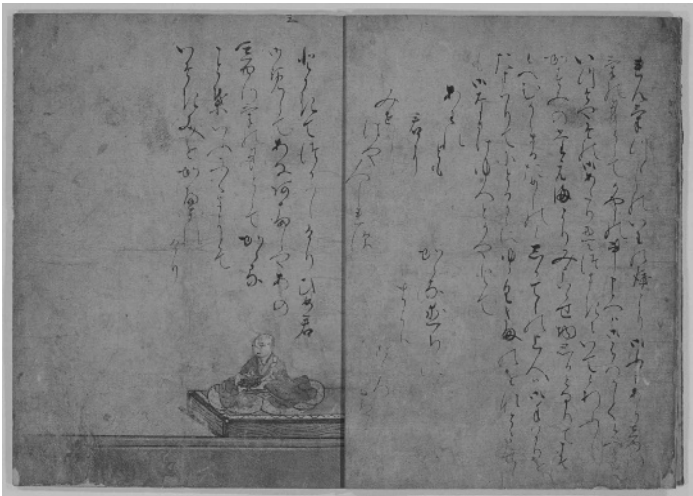
なふみえさせ給ふ事めてたく侍り候なり

《『かぐへらの姫君』》



三丁ウ

四丁オ



四丁ウ

五丁オ



五丁ウ

六丁オ

## 《四十二の物あらしむ》(國大本) 冒頭部

